

## 初期 *Nature* 誌復刻版について

河原田 伊左男

2002年に、英国科学雑誌 *Nature* の初期10年間分(1869年~1879年)の復刻版がPalgrave Macmillanから刊行された。当館では、予算の関係で2004年に購入することになった。

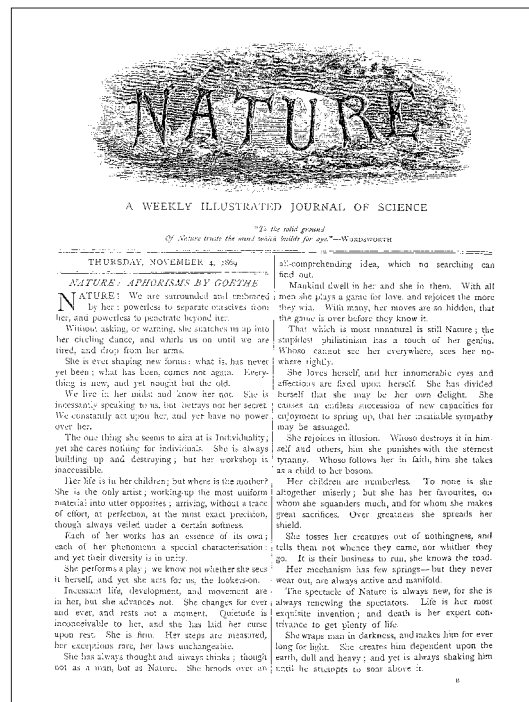
*Nature* と言えばあまりに有名すぎて、正直なところ、『図書館フォーラム』で多くのページを割いて述べるべきなのか? と思ひもする。だが、逆に有名すぎて何となく知った気になってしまっている、ということがあるのも事実であり、私自身そうなのであった。

現在のタイトルは、創刊当時と若干異なり、*Nature: international weekly journal of science* である(創刊当時のタイトルは、*Nature: a weekly illustrated journal of science*)。米国の *Science* と共に世界的に権威のある科学誌であり、掲載された論文が科学の歴史そのものであるといっても言い過ぎではないだろう。例えば、DNA二重らせんやクローン羊ドリーの論文が最初に掲載されたのも *Nature* である。

近年では、日本からの論文の掲載数が増加している。少し古い情報になるが、1999年5月18日の読売新聞によれば、

世界で最も権威あるとされる科学雑誌、英国の「ネイチャー」に掲載される日本からの論文数が確実に増えている。(中略)ネイチャー・ジャパンによると、全体の論文数は年間約千件で、米、英が群を抜いて多いが、日本の年間八十四件は他の欧州各国と比べてそんな色ないという。とのことである。また、2005年1月15日の朝日新聞夕刊には、1985年の調査で、一人で書いた論文の掲載数では南方熊楠が世界で最も多かったことが分かったとの記事が掲載された。

創刊号は1869年11月4日号。天文学者ロッキアー(Joseph Norman Lockyer, 1836-1920)により創刊さ



創刊号

れた。ロッキアー 33歳のときである。

彼は、初め陸軍省秘書官で、余暇に天文学を研究していた。サウス・ケンシントンに王立科学大学(Royal College of Science)が創立されるとともに太陽物理観測所長となり、天体物理学教授を兼ねた。太陽物理学、恒星物理学の発展に寄与し、皆既日食の観測や太陽スペクトル分析によるヘリウムの発見について、*Nature* に論文を掲載している。

この1869年というのは、メンデレーエフが元素周期律を発見し、セルロイドがアメリカで発明され、トルストイが『戦争と平和』を完結し、スエズ運河が正式開通した年である。日本では、維新戦争が終結し、早矢仕有的が丸善の前身を横浜に設立した年である。いまや誰もが知っているような出来事があった頃の話、つまりこうした歴史上の出来事の一つとして *Nature* の創刊がある。ちなみに、ダーウィ

ンが進化論を発表したのはその10年前、1859年であり、彼はContributorとして名を連ねている。

週刊の科学雑誌を刊行することについては、それだけの数の論文が集まるのかという疑問の声や、科学雑誌の読者は世の中でほんの一握りだろうという厳しい意見があったという。現在のように、自然科学系の雑誌が数え切れないほど刊行され、しかも1冊あたりが電話帳のように厚く、図書館の書架スペースを確保するのに苦労している状況とは大きな違いである。

創刊号を開くと、地球をバックにした「Nature」の文字が見える。そしてそのすぐ下に、ワーズワースの詩 "A VOLANT Tribe of Bards on earth are found" の一部 "To the solid ground of Nature trusts the mind that builds for aye" が引用されている。<sup>\*1</sup>

また、記念すべき最初の記事は、生物学者でダーウインの友人でもあったハクスリー (Thomas Henry Huxley, 1825-1895) が訳した、ゲーテの『自然』という詩 (ハクスリーはRhapsodyと呼んでいる) である。ロッキアーから創刊号の最初を飾る記事を頼まれたハクスリーの頭に最初に浮かんだのが、この『自然』であったという。

ロマン派を代表する詩人であり、イングランド北西部の湖沼地方の自然に育てられたワーズワースの詩と、大文豪でありつつ自然科学にも大いに関心を寄せたゲーテ<sup>\*2</sup>の詩という、2つの文学作品を科学雑誌創刊号の先頭に持ってくるころは、ヨーロッパのどでもいえようか。興味深いところである。

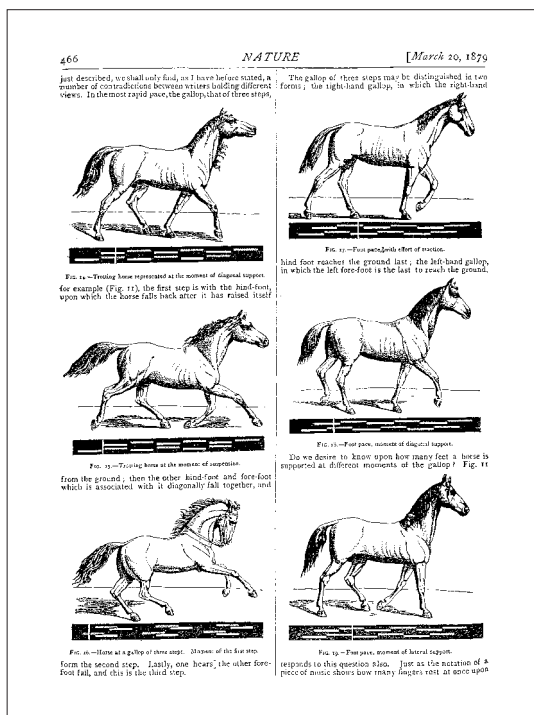
第2号(1869年11月11日刊)の66頁には、Nature刊行の目的が記載されている。

第1に、科学に関する業績や発見の情報を一般の人々に提供し、科学への理解を促すこと。第2に、様々な科学分野における進歩について、世界中の情報をいち早く提供し、また、その時々にかかる多種多様な疑問について、議論する機会を提供することにより、科学者の手助けをすること、である。

この2点を達成するため、以下のような記事が掲載される。

- ・ 多種多様な分野の優れた専門家によって書かれた論文
- ・ 科学の発見についての、(必要であれば挿図付きの) 全文記事
- ・ 大学等で自然に関する知識を広めるために行なわれたことの記録や、科学教育を援助するための案内

- ・ 科学研究のレビュー
- ・ 英米とヨーロッパ大陸の学会及び逐次刊行物の重要論文の抄録
- ・ 国内外の会議報告
- ・ 読者投稿に対するコラム (南方熊楠の記事もここに多く掲載された)



馬の歩調

タイトルに「illustrated journal」とあるように、挿図は重要なものである。当時、写真技術は初期の段階にあり、Natureでは木版を用いている。白黒なので分かりにくいだが、例のように、細かいところまで彫られていて、その技術の高さが分かる。

Natureでは、ある記事が載ると、それに対する反論と、さらにその反論への意見のやりとりが頻繁にあった。現在名誉編集者となっているジョン・マドックスは、その様子を、「最新号が届くたびに、ペンを手に持って、何か(意見を)書いて送ろうと待ち構える、小さな軍隊のような読者達」と呼び、「よい雑誌は、読者を会員とするクラブのようなものだ」とする。このように読者を熱中させることができたことが、Natureの成功の理由の一つであろう。そして、そういった雰囲気を保つために重要だったのは、議論の応酬を支える、郵便のスピードと植字工の製版スピードの速さであった。

当時、郵便 (Royal Mail) は、ロンドン市内であれば、朝に出した郵便が昼までに相手に届き、英国

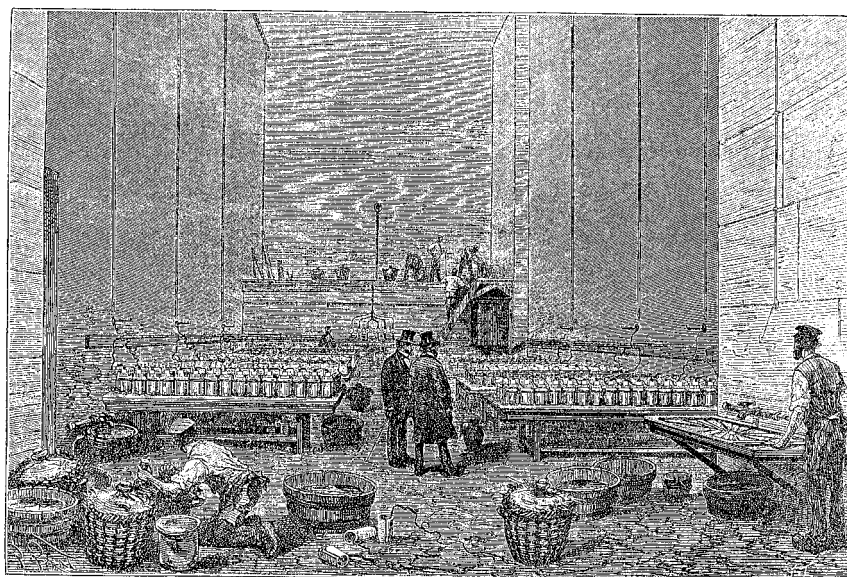


Fig. 6.—View of the Electric Room at the New Opera.

### パリオペラ座電気室風景

内であっても、翌日には確実に届いたという。こうして届いた原稿は、植字工が熟練の技で製版していく。ベルによる電話の発明が1876年、現在のタイプライタの原型が発明されたのが1868年（米レミントン社が実際に製造開始するのは1875年）、写真技術も未熟という、便利なツールのない時代に、*Nature*の人気はこうした人々の技術によって支えられていたとも言えるのである。

*Nature*は、新規到着分については図書館1階の自然科学系雑誌コーナーに、製本したものは地下2階に請求記号 M\*405\*N 1 でVOL. 169 (1952年)から揃っている。今回の復刻版についても、同様の請求記号を与える予定である。

### 注記

- \* 1 創刊号を見ると、“that”の部分で“which”になっているが、例えば *The poetical works of William Wordsworth*. Oxford Clarendon press 1946 では“that”であり、*Nature*でも1869年11月11日号からは“that”になおっている
- \* 2 ゲーテが自然科学に大きな関心を寄せたことを示す

一例として、以下を引用しておく。

「ヴァイマル版大ゲーテ全集において自然科学に関する著作は十四巻をしめる。これに書簡集五十巻と日記三十七巻において多くの箇所が広範にこのテーマを取り扱っているのを加算するならば、この数字による概観だけでも自然研究が彼にあって重要なものであったという印象を受ける。」

ゴットフリート・ベン著 大森道子訳 “ゲーテと自然科学”『ゲーテ全集』別巻 東京 潮出版社 1979 p.487

### 参考文献

多くは復刻に合わせて作られた索引巻の序文を参考にした。

『岩波西洋人名辞典』増補版 東京 岩波書店 1981

『情報の歴史』増補版 東京 NTT出版 1996

『コンサイス科学年表』東京 三省堂 1988

(かわはらだ いさお 学術資料課)